

39 「ことばと思考」

貿易の技術的障害に関する協定（WTO/TBT協定）により、輸出入に伴う技術上の障害を取り除くことを目的に、国内規格を国際規格に合わせることを要求されている。

国際規格ISO、電気の世界ではIEC（International Electrotechnical Commission）の第一公用語は英語であるから、世界各国の人々にとって英語は必須言語となっている。

日本人はどうしても英語で書類を読み、理解しなくてはならないわけだ。

自国語で自由に読める人と、慣れない英語で勝負しなければならないのは大変だし、何より不利である。

建築電気設備に関するIEC規格を検討する国内委員会IEC/TC64（Technical Committee 64）は、事務局（本部ジュネーブ）で作った規格の原案について、日本としての受け入れを審議している。原案に対して内容の修正や、日本として独自の条件を付けるなどを討議して意見をまとめる。

今回私は、電気設備の「省エネルギー」に関する規格の担当になり、60ページほどの文書と格闘した。内容を理解し、日本としての意見をまとめて会議にかける。

大変なのは翻訳作業だ。まず、内容を理解するための英訳で苦勞するわけだ。それが終わると技術の内容に入るが、省エネルギー技術に関しては、平均的な世界レベルに比較して日本の方が格段に進んでいるし、国内には国際平均より厳しい「エネルギーの使用の合理化に関する法律（省エネ法）」があるため、原案をそのまま認めても日本としては特に問題ない。国内法がIEC規格の内容をクリアしているためである。

担当文書に対する作業の80%は翻訳作業に費やし、残り20%が技術的な検討の時間という感じであった。こういうこと一つを取っても、自分の言葉が国際的に通用するということが如何に有利かわかるだろう。

大学では電気工学を学んだが、卒論を書くための参考書として英語の専門書が必要だった。日本で高度な技術を勉強するには、どうしても技術先進国である欧米の文献に頼らざるを得ない歴史的な背景がある。そして歴史といえば、日本がこれだけ経済的に発展し、国際的に大きな貢献をしているのに、未だ国連の常任理事国になることができないのは、第2次世界大戦の敗戦国であることと無関係ではない。

これは、EU第一の経済大国ドイツも同じである。

ほとんどの国際会議において公用語は英語であるが、自国語でなくても比較的英語に近い言語を持つ西欧人たちに比べ、系統の全く異なる言葉を持つ日本人は相当なハンデがある。

明治以降、日本は西洋文化を偏重し“舶来”に対するコンプレックスを抱き、日本語や日本文化は軽視されていった。そして現在「英語信仰」「英語中心主義」に陥っている。

英語は国際共通語として、他の言語に対して突出して強い力を持つようになり、他言語を駆逐し国際的な場で使うことができなくなってしまう。

その結果、英語力の優劣によって人々のコミュニケーション能力に差がつき、格差や不平等を生んでいる。

このような状況の中、筑波大学の津田教授は日本語防衛論を唱えている。

津田教授は、英語による支配に危機感を持ち「幸せな奴隷」になってはいけないと警告している。

かなり前から、小学校から英語教育を導入する機運が高まっている。私としては、子供の頃から個人的にやるのは良いとしても、義務教育として強制することについては反対である。

正しい日本語をしっかりと身に付けることが最も大切なことだ。日本語が第一、英語はその後でよい。

フランスでは英語から自国語を守るため、1994年にフランス語使用法（フランス語の使用に関する法律）を定めた。公文書や国際会議でフランス語の使用を義務づけ、テレビやラジオでの外国語の濫用を防ぐための法律である。

ヨーロッパ諸国は、英語を使いながらも英語が自国に過度に広がることに警戒しているのである。

このことは、日本語ひいては日本人のアイデンティティ（「独自性」というより英語で「アイデンティティ」と言った方がしっくりくるのは、かなり英語に侵されているように思われて仕方がないが）を失うことになり兼ねないので、非常に重要な問題だと思う。

さて、私がこの一文で言いたかったことは、そのようなことではなかった。

世界には多くの言語があるが、私はその違いにとっても興味を持っている。

なぜそのように違うのだろうか？その理由は何だろうか？何故そんなにも多様性に富んでいるのだろうか？

言葉は文化と一体であり、話す人の民族性を反映する。

今井むつみ著『ことばと思考』を興味深く読んだ。

この本のテーマは「ウォーフ仮説」は本当に正しいのかどうか？ということだ。

ウォーフ仮説とは、

「それぞれの言語体系に応じて、その数だけの世界観が存在する」

「言語はその話者の世界観の形成に差異的に関与する、つまり言語が異なる二人の話者の間には相互に理解不可能なほどの溝が存在する」

言語は単に記号やコミュニケーションの手段であるだけでなく、無意識にそれを使用する主体側の認識や思考パターンをも形成する、といった文化人類学上の説である。

著者は「この仮説は正しいのだろうか？」という観点から検証を行っている。

というのは、人間には言語の違いを超えて、共通の世界の把握の仕方があるようにも思えるからだ。

以下『ことばと思考』から引用する。

（よりわかり易くしようと、具体例を入れたので長くなるが是非読んで欲しい）

今井氏は、「私たちは世界にあるモノや色、モノの運動などを、単に見ているわけではない。見るときに、脳では、ことばもいっしょに想起してしまうのだ。つまり何かを見るとき、言語を聞こうと聞くまいと、言語は私たちの認識に無意識に侵入してくる」と述べている。

モノは多くの場合、複数の知覚や機能属性を持っていて、どの属性に注目するのかが言語によって異なるのである。

言語によっては、文化の上の重要性によって、とても細かい分け方に応じた、それぞれの基礎語（独立した単語）があるが、基礎語の指す範囲自体が大きく異なる場合もある。

例えば容器の名前である。缶詰やジャムなどの保存食品や、薬、飲み物、菓子、シロップ類などを入れる、日常生活でしょっちゅう目にする無数の容器を、私たちはどのような名前と呼ぶだろうか。

英語では jar, bottle, jug, container, can, box などの語を使う。

中国語は、瓶(ピン)、桶(トン)、罐(カン)、**盒**(フ)、管(クワン)などの語を用いる。スペイン語はもっと細かくて、flasco(ビン、香水・化粧品ビン)、envase(コンテナ)、botella(ボトル)などをはじめとして、15くらいの名前で区別する。

日本語ならどうだろう。日本語は外来語が定着していて、何が基礎語なのかよくわからない。

昔からある瓶、缶、箱などの語に加え、最近はカタカナ語で、ボトル、ジャー、タッパー、ボックスなども使われている。

しかし、異なる言語の間では、様々な種類の容器に使う語の数だけでなく、それぞれの語によって分けられるカテゴリー自体も大きく違うのである。

図1は英語と中国語で、いろいろな形、機能を持った容器に対して、どのように名前がつけられているかを示したものである。一見してわかるように、中国語と英語では、容器の名前のカテゴリーが大きく違っている。

中国語の「瓶」は、英語を母語とするアメリカ人が jar と呼ぶモノに加えて、bottle と呼ぶモノの一部、container と呼ぶモノの一部が含まれる。

「罐」は can に対応するかと思いきや、英語で can と呼ぶモノのすべてが含まれるわけではなく、bottle と呼ぶモノ、container と呼ぶモノの一部も含む、といった具合なのである。

日本語ではこれらの容器をどのように呼び分け、英語、中国語とどのように違うカテゴリー分けをするのかを分析してみると、その違いがわかるだろう。

世界の言語のほとんどは、名詞を文法によって、さらにカテゴリーに分けている。

ドイツ語、イタリア語、フランス語などのヨーロッパ系の言語を学んだことがある人は、これらの言語が名詞を「文法的性」によって分けることを知っているだろう。

私たちはモノを数えるときに「助数詞」を使う。「バナナ一本」「リンゴ一個」「クッキー一袋」と言うときの「本」「個」「袋」などである。文法的性にしても助数詞にしても、モノ（厳密に言えばモノの名前である名詞）を文法で決められたカテゴリーに分類しているのだ。

「文法的性」(grammatica gender) の「性」(ジェンダー) というのは、もちろん「男性」「女性」という生物学的な性由来する。ただし、文法的性の「性」がいつも男性、女性の二つで、いつもこの二つのどちらかのカテゴリーに名詞を分けているかということ、そうではない。

イタリア語やフランス語は男性、女性という、生物学的な性とおなじ2つのカテゴリーに分ける。しかし、言語によっては男性、女性の他に第3の性カテゴリーを持つ場合もあり、このような言葉では、人の子どもは第3のカテゴリーに属す。この言語に限らず、性文法のある言語の多くで、人の子どもは中性扱いされる。

一人前の大人でない子どもは性を持たない、と言語的には分類されるのである。

ただし、文法的性を持つ言語で、わかりやすいカテゴリー分けをする言語は非常に稀である。フランス語やイタリア語、スペイン語は性のカテゴリーを男性、女性の二つしか持たないので、これ自体はわかりやすいのだが、そうすると、太陽とか、月とか、机とか、椅子とか、そもそも性を持たないモノも男性、女性いずれかのカテゴリーに入れられることになる。

また、動物の場合、オスとメスがいるわけだが、必ずしも動物の生物学的な性は文法の性と一致しない。というのは、多くの動物の名前はオス、メス共通である。例えば、英語ではメスライオンに lioness

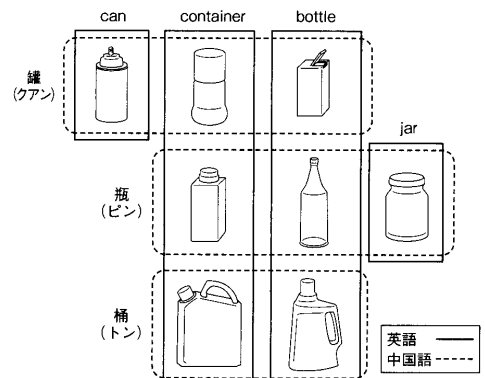


図1 容器の名前 英語と中国語にみるカテゴリーの違い

ということばはあるが、これはあまり一般的ではなく、lion ということばがオスライオンにもメスライオンにも用いられる。

文法の性は名詞につく。つまり「ネコ」「イヌ」「ライオン」という語が男性、女性カテゴリーに割りふられるわけである。ネコやイヌはそれぞれオスとメスがいてはいるわけだが、動物の生物学的な性に呼応して、文法的性が変わるわけではない。

例えば、ドイツ語ではネコは女性名詞だから、オスネコも文法的には女性として扱われる。文法上の性は代名詞とも連動しているのだから、ネコを代名詞で表すときには「彼女」となるわけである。それがオスネコでも。

マーク・トウェインはドイツ語について以下のように語っている。「ドイツでは女の子 (Madchen) は性がないのに、チューリップにはある……木は男性でその芽は女性、葉は中性である。ウマは性がなく、イヌは男性、ネコは女性……オスネコもだ！」。

動物やモノの文法上の性が、性文法を持つ様々な言語の間で一致しているわけでもない。

太陽はドイツ語では女性、スペイン語は男性、ロシア語では中性である。つまり、文法的性を持つ言語の間でも、それぞれのモノをどの性のカテゴリーに入れるかは、言語によって大きく異なるのである。

動詞はどうだろうか？

モノを移動するときに使う「持つ」「運ぶ」というのも日常的にいつも人が行う動作である。おもしろいことに、英語は「歩く」「走る」などの動きでは「どのように動くか」で非常に細かく動作を区別してカテゴリーを作っているのに、「どのように持つか」に関してはほとんど区別しない。

ただ、モノを持つだけで移動を伴わない hold と、モノを持ちながら移動する carry は、まったく別の動作として区別される。

日本語は英語よりも少し細かく「持つ」動作を分けている。例えば、肩でモノを支えて持つのは「担ぐ」、背中で支えるのは「背負う」、両腕で支えて持つのは「抱える」である。

このほか、日本語は人（子ども）やペットのような特別な動物のときは、「背負う」ではなく「おぶる」と言い、「抱える」ではなく「抱く」と言う。

日本語はそもそも、生きていないモノが存在するときは「ある」と言うが、人や動物は「いる」と言う。人、動物と無生物で動詞を区別するのは日本語の特徴といえるかもしれない。

英語をはじめとした多くの言語は、動作主あるいは動作対象が動物か無生物かということで、別の動詞を使うということはあまりしない。

日本語よりもさらに細かく「持つ」動作を分けるのが中国語である。中国語は体のどの部分でモノを支えるかだけでなく、モノを持つときの手の形でも動詞を区別する。これを図2で表してみた。

頭で支えるのは「頂(テイ)」、肩で支えるのは「扛(カン)」、背中で支えるのは「背(ペイ)」、両腕で抱えるのは「抱(バウ)」である。肩から下げるのは「挎(ケ)」、片腕とわき腹の間に挟んで持つのは「夾(ジャ)」だ。手の平を上にして持つ（おぼんを持つような動作）のは「托(トウ)」、両手（ときには片手）で中のものをこぼさないように水平に保ちながら持つ動作は「端(デュアン)」。片手で普通に持つときは「拿(ナ)」、女性がトートバッグを持つときのように、手に下げて持つときは「提(テイ)」である。

英語では hold という動詞で一まとめにする動作を、中国語は20くらいの、単一の形態素からなり、互いに対比的に用いられる「基礎語」のカテゴリーに分割するのである。

ただ、おもしろいことに、中国語は英語や日本語が区別する大事な特徴……モノを持っているだけか、

モノを持ちながら移動しているか（つまり「持つ」か「運ぶ」か）には無関心で、モノを動かさずただその場で持っているだけでも、持って他所へ移動させる場合も同じ動詞を使う。

つまり、英語と中国語はモノを持つ、持って移動する、という日常生活で無限に存在する動作に対して、まったく違う基準でことばの 카테고리をつくり、動作を分割しているのである。

日本語は英語より細かく動詞を使い分けるが、中国語ほどには細分化していない。韓国語は、日本語にとっても似ているが、まったく日本語の分け方と同じというわけでもなく、微妙に違うところがある。

図3では、中国語ですべて区別される「持つ」動作を、日本語と韓国語ではどのように切り分けているかを図示してみた。日本語、韓国語、中国語という3つの言語で、それぞれどのように「持つ」動作を切り分けているか比較してみしてほしい。



図2 「持つ」動作を表す語（中国語）

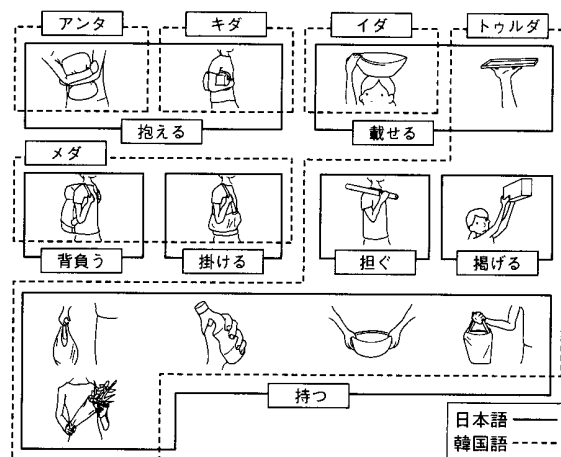


図3 「持つ」動作を表す語（日本語・韓国語）

色の認識、モノの認識、性の認識、空間の認識、時間の認識についてのいろいろな実験から、大勢ではウォーフ仮説は正しいといえそうである。特に、空間や時間に関してどのような言語を話すかによって、大きく認識の仕方が異なっているといえそうだ。（このあたりの記述は割愛）

しかし、異なる言語の話者の認識が、ウォーフがいうほど異なるかということ、それは異論が出そうである。

ウォーフは、世界は「さまざまな印象の変転きわまりない色やモノの認識流れ」として提示されており、言語がそれを整理し、秩序立てるのだと主張した。

しかし、様々な実験の結果からは、色やモノの認識では、言語による話者の認識の違いは、広範囲に及ぶ本質的なものではなく、カテゴリーの境界を歪めたり、分類のときに注目する知覚特徴が少し変わったりする程度といえそうだ。

つまり、私たちの見る世界は、ウォーフが考えたように、万華鏡のように変転極まりなく無秩序で、言語がないとまったく整理されない、というものでもないといえる。

このように考えてみると、言語による世界の切り分け方は、非常に多様ではあるが、そこに何らかの秩序があり、普遍的なものがあるのではないかと考えられる。

例えば色については、言語における色の世界の分割の仕方は、世界中の様々な言語の間で一様ではな

い。しかし、だからといって、様々な言語が色をカテゴリーに分けて名前をつけていく仕方に、何の規則性もないわけではない。非常に多くの言語を集めて、平均をとると、色の領域の「最も自然な分け方」が垣間見えてくる。

モノの名前でも、同じようなことがいえそうである。

世界中の言語は、モノをカテゴリーに分類し、それに名前をつけるとき、まったく同じように分類しているわけではない。

その言語の話者たちの環境、文化にとって重要なことは細かく区別して、別の名前で言い分けている。

しかし、モノの名前のつけ方が全て文化的重要性だけで決まり、文化が異なると、基礎語で名前のつくカテゴリーにまったく普遍的な共通性がないかということ、決してそんなことはない。

文化的にも地理的にも、産業の発展の度合いも、まったく異なる文化圏の言語を満遍なく含めて調査をすると、全体的に見れば、世界中の言語はモノ（特に自然に存在するモノ）を基礎語で名づけていく際には、言語の間の一致度が非常に高く、それは科学的な分類の一般レベルとほぼ重なることがわかった。

同じようなことが、動きの名前のつけ方にもいえる。

私たちがアルク、ハシルという二つの動詞を使って表現する、人の身体を使った移動の動きは、他の言語ではもっと細かく分けられることが多い。

どのくらい細かく分けるかは、言語によって異なる。しかし、非常にゆっくりのアルク動作から一定の割合でスピードを上げていって、スピードを上げるごとに動きの呼び方をシステムティックに聞いていくと、日本語話者がアルクからハシルに切り替えたのと同じスピードのところで、スペイン語話者も英語話者もオランダ語話者も、語をスパッと切り替えることがわかった。

たぶん、世界には誰にでも知覚することができる明確な区切りが存在するのだろう。

モノの種類が違えば、見た目も異なる。アルク、ハシルの動作にしても、スピードが変わっていくと、四肢の動きの連動の仕方が自然と変わり、その変わり目は、多くの人が言語・文化にかかわらず、普遍的に感じることができるのだろう。それが、動作の呼び方に影響を与えるといえそうだ。

一般的にモノの名前は、言語の間に普遍性が高い。あるモノのカテゴリーと、それに隣接する別のカテゴリーの間の境界が、知覚的に明確だからだろう。

しかし、モノとモノの間関係については、どこにも明確な境界線がない。私たちが存在する三次元の空間上に、空間関係をカテゴリー化するための線など引かれていないのだから。しかし、それぞれの言語は、ある（極めて抽象的な）基準に沿って、関係のカテゴリーをつくり、それに名前をつける。実際には世界に存在しない境界線を、言語が引くのである。

最後に、モノの名前をさらに性別で分けたり、形や機能で分けたり、数えられる・数えられないという基準で分けたりする文法上の規則について、言語の間に普遍性が果たしてあるのかどうか、考えてみよう。

すべての言語に共通の名詞の分け方はない。しかし、名詞を文法カテゴリーとしてカテゴリー化する基準は無制限、無制約に存在するわけでもない。

それどころか、名詞を分類する文法は、英語のような可算性、つまり数えられるか数えられないかを基準にして名詞を分類する言語、イタリア語やドイツ語のように名詞を性で分類する言語、それに日本語のように助数詞で名詞を分類する言語、と大きく3つに大別できる。

世界に存在する言語の数を考えれば、名詞を分類する文法がたった三種類に収斂するのは、実は驚くべきことである。しかも、地理的に近接している地域で同じ分け方をするわけではない。

例えば、助数詞は日本語、中国語、韓国語など東アジアの地域だけでなく、アメリカ大陸の先住民の言語の多くや、アフリカの多くの言語でも見られる。性別で分ける言語もヨーロッパ大陸のインド・ヨーロッパ語族の言語に限らず、アフリカ、パプアニューギニア、南アメリカ大陸の言語で見られる。

可算性について文法的に表す言語も、四大陸やパプアニューギニアなど世界中に散在している。

つまり、モノの可算性、性、動物性（動物であるか否かの区別）や形、機能などは人にとってあまねく重要な特徴で、言語はそれらによって名詞を分類する。

しかし、その特徴のどれを選択するかは、それぞれの言語によって異なるのである。

英語は可算性による分類を選択し、性や動物性、形による分類は選択しなかった。ドイツ語やイタリア語は可算性と性の両方を選択した。日本語は動物性、機能性、形などを基準に分類する方法を選択し、可算性や性による分類は選択しなかった。

さらに、それらの特徴に基づいていくつの分類カテゴリーを設けるかも各言語の選択となる。

例えば、性を基準に名詞を分類する言語でも、生物的な性を直接反映した、男性・女性の二つのカテゴリーしか持たない言語もあれば、それをさらに細分化し、四つ、五つ、あるいはそれ以上のカテゴリーに分けていく言語もあるのである。

助数詞も、ほとんどの言語で形（細長い、平たいなど）、動物性、機能などが使い分ける基準になっている。きっと、それらは人にとって、みな重要で目立つ分類の基準なのだろう。

それぞれの言語の特徴に目を向けると、多様性のほうが目立つし、違いのほうが共通性よりも見つけやすい。

しかし、人の思考の性質、言語の性質を共に理解するためには、多様性のみならず共通性の理解が非常に重要で、それに目を向けることは必須なのである。

ことばと認識の関係という点、違う言語の話者の認識が違つかどうかという点に興味が集まりがちだ。

異なる言語が話者にどのような認識の違いをもたらすかを知ることは、確かにとても大事なことだ。しかし、相対的にいって、言語を獲得した後の異なる言語の話者の間の認識の違いより、言語を学習することによっておこる、子どもから大人への、革命といってよいほどの大きな認識と思考の変容こそが、ウォーフ仮説の真髄であると考えてもよいのではないだろうか。

言語による認識の違い（あるいはズレ、歪み）を理解することは、外国語を学ぶ上でとても大事なことである。

鈴木孝夫氏は、『日本語と外国語』の中で、次のようなエピソードを書いている。

鈴木氏は、英語の **orange** という色のことばを日本語の「オレンジ色」と思い込んでいた。その結果、レンタカーを借りたとき、**orange car** が来ると言われ、ずっと待っていたのにいくら待っても車は来ない。かわりにこちらの様子をうかがっている茶色（と鈴木氏には思われた）の車がホテルの前に停まっていた。それが、鈴木氏が待っていた車だったのだ。

鈴木氏が運転手に「『オレンジ色の車』と言われたからオレンジ色の車を探していたのだ」と言ったところ、「これがオレンジ色の車ではないか」と言い返されて、はじめて英語話者の意味する **orange** と私たち日本語話者の意味する「オレンジ色」には認識にズレがあるということに気がついた。

鈴木氏のような英語の達人にして、様々な言語を比較分析することを専門としている人でさえ、一見、

母語と外国語の間で対応するように思われることばが存在すると、2つのことばの指す範囲、つまりカテゴリーの境界が同じであるかのように思い込んでしまうことを、このエピソードは如実に示している。

私たちの認識は母語のフィルターを通した認識であり、別の言語のフィルターを通した認識は自分の認識とズレているかもしれない、ということを理解することはとても重要なことであるが、実際には、これはそんなに容易なことではない。

私たちの認識は言語と切り離せない関係にあり、母語での世界の切り分け方があまりにも自然に思えるので、その切り分け方が唯一無二の切り分け方ではないことになかなか気がつかないのである。

実際、言語による世界の切り分け方の差違に気づかず、自分の認識が世界の標準だと思い込むと、外国語のことばの意味を「正しく」理解することを著しく妨げる。(ここで「正しく」というのはその外国語を母語とする人たちが持つことばの意味を共有する、ということである。)

「モノを持つ」に関係した中国語の動詞群を、日本語を母語とする人たちがどのように学習しているか調べてみた。すると、学習者は日本語が区別する「抱える」「背負う」「担ぐ」に対応することばは覚えていたが、日本語ではすべて「持つ」としか言わない、手で持つ持ち方を表す一連の動詞(両手で容器の上から持つ、手を上にして手のひらを支えにして持つ、片手を下にしてモノをぶら下げて持つ、片手を上にして指で持つ)に対応する動詞はほとんど覚えず、全部「拿(け)」という比較的意味の広い動詞ですべて代用していた。

学習者は母語で区別しない切り分けに対して、それが中国語で重要な区別であるにもかかわらず、その重要性に気づかないため、母語話者がその状況で使うことばに注意を向けず、一見対応しそうに見えることばを過剰に使い続けてしまうのだ。

外国語を学習するとき、外国語での世界の切り分け方は母語の切り分け方とちがいが、それが「思考」の様々なところで、母語が外国語に影響を与えるといつてよい。

従って、母語での認識と並行して、外国語のネイティブとまったく同じ認識体系を持つ、ということは非常に考えにくいことである。

「バイリンガル」とはいつても、ほとんどの人たちは、2つの言語を同じレベルの習熟度で扱っているわけではなく、優勢なほうの言語が、2番目の言語を使用しているときでも思考に影響を与えているといつてよいだろう。

ただ、外国語に習熟することは、別の意味で認識を変えるといつてよい。1つの言語(つまり母語)しか知らないと、母語での世界の切り分け方が世界中どこでも標準の普遍的なものだと思込み、他の言語ではまったく別の切り分けをするのだ、ということに気付かない場合が多い。

外国語を勉強し習熟すると、自分たちが当たり前だと思っていた世界の切り分けが、実は当たり前ではなく、まったく別の分け方もできるのだということがわかってくる。この「気づき」はそれ自体が思考の変容といつてよい。

言い換えれば、外国語を勉強し習熟することで、その外国語のネイティブと全く同じ「思考」を得るわけではないにしても、母語のフィルターを通してしか見ていなかった世界を、別の視点から見ることができるようになるのである。

つまり、バイリンガルになることにより得ることができるのは、その外国語の母語話者と同じ認識そのものではなく、母語を通した認識だけが唯一の標準の認識ではなく、同じモノ、同じ事象を複数の認識の枠組みから捉えることが可能であるという認識なのである。

自分の言語・文化、あるいは特定の言語・文化が世界の中心にあるのではなく、様々な言語のフィルターを通した様々な認識の枠組みが存在することを意識すること。

それが多言語に習熟することによりもたらされる、最も大きな思考の変容なのだと考える。

(『ことばと思考』より)

これを読んでさらに興味が湧くのは、言語が世界を切り分けるとき、どの属性に重点が置かれるかということだ。このことは大きく民族性に関わるのではないかと思う。

農耕民族と狩猟民族では自ずと違ってくるだろう。農耕民族は“穏やか” 狩猟民族は“攻撃的” といった際立った違いがある。しかし、それも住んでいる環境の違いというこに帰着するといえないこともない。このように考えてくると、例えば占領されて全く違った言葉を強制された人々はどうなのか？ など次々と疑問が出てくる。

(2012. 9. 11)